

ボイス『ダビデの哀悼歌』の作品的特質

高 際 澄 雄

序

ヘンデルの『サウル』(Saul, 1739)は、彼のイタリア歌劇期末期、すなわちまだ実験的にオラトリオに取り組んでいた時代の傑作オラトリオとして知られている。歌詞は『メサイア』(Missiah, 1742)の作詞家と同じジェニズ(Charles Jennens)で、旧約聖書『サムエル記』の上下に渡る複雑な政権交代劇が、嫉妬と正義に関わる心理劇的要素を加えながら、劇的に描き出されている。後世ベートーヴェンが絶賛したこの作品は¹、ヘンデルのもっとも高い芸術性を示した作品の一つと言える。

このオラトリオの成立に関わったと考えられる作品が、ボイス(William Boyce, 1711-1779)の『ダビデの哀悼歌』(David's Lamentation over Saul and Jonathan, 1736)であった。ボイスはグリーンの直弟子であり、『ダビデの哀悼歌』が発表された時期に、ヘンデルはグリーンと不仲になっていたので、直接音楽を聴くことはなく、また楽譜も出版されていないことから、音楽を知ったとは考えられないが、音楽仲間から評判を聞いたことは十分にあり得る。また歌詞が出版されたので、何らかの形で見ている可能性もある。『サウル』の制作はジェニズの提案によると言われているので、ヘンデルが積極的にその作品に取り組んだものではないにせよ、取り組んだからには、ボイスの作品を越えるものを作ろうと考えた可能性は十分にあるのである。

だが、当のボイスの『ダビデの哀悼歌』とはどのような作品だったのだろうか。どのような経緯で作曲され、どのような歌詞を持ち、どのような音楽構成になっていたのであろうか。作品としてどのように評価すべきなのだろうか。私たちはあまりにも知らないことが多い。本論で、こうした疑問に少しでも迫りたいと考える。

1 アポロ協会における初演

ボイスの作品で初演について分かっているものは少ないが、『ダビデの哀悼歌』については、1736年4月16日にアポロ協会(The Apollo-Society)によりロンドンのテンプルバー側のデビルズタバン(Devil's Tavern)で初めて演奏されたことが、歌詞を出版した詩人ロックマン(John Lockman, 1698-1771)の序文から分かっている。それではアポロ協会とはどのようなものだったのだろうか。

この音楽協会は、ボイスの師グリーン(Maurice Greene, 1696-1755)によって、1731年に結成された。そのきっかけは、親しくしていたイタリア人作曲家ボノンチーニ(Giovanni Battista Bononcini, 1670-1747)が剽窃の嫌疑を受け、権威ある音楽家の団体、古楽アカデミー(The Academy of Ancient Music)を除名されたのを、紹介者であったグリーンが責任をとって脱退し、新たに音楽家団体を設立したのだという²。

ローバト・ブルースによれば、1740年出版のアポロ協会の歌詞によって、12曲の小規模の劇的作品が作曲されていたことが知られる³。

詳しい演奏状況については分からないことが多いのだが、大英図書館に所蔵されている1733年総会決定のアポロ協会会則(The Standing Orders of The Apollo-Society)から推測することはできる⁴。

会則は13章からなっている。概要を示すと、第1章は役員選挙に関する規則で、それによると毎年8月第1水曜日に開催される会員総会で、財務(Treasurer)、運営委員(Managers)、執事(Stewards)の候補者が提示され、同月の第2水曜日に選挙が行われる。定数は財務1人、運営委員は演奏会員(performing members)から6人、鑑賞会員(audient members)から4人の合計10人、執事は鑑賞会員から6人が選ばれる。鑑賞会員が

ら選ばれる運営委員は、執事を経験していなければならない。運営委員の任期は最長2年である。楽長（Presidents of the Music）は演奏会員から6人が選挙または指名で選ばれ、8月第2水曜日にその年度の担当月を決め、ローテーションで担当する。

第2章は楽長の職務に関する規則であるが、楽長は担当月の演奏会を指揮し、演奏者の配置を決め、楽譜と楽器を管理する。また運営委員と協力し、運営委員も兼務する。

第3章は財務の職務に関する規則である。財務は現金と口座を管理し、金の出し入れを行い、会費納入を記録する。楽器や楽譜、その他の会の財産を火事から守り、また損失があった場合に備えて目録を作成する。財務は運営委員と協力すると共に運営委員を兼務する。6月に会員に会費を請求し、8月第1水曜日に運営委員によって招集される総会の総会通知を少なくとも4日前までに発送する。財務は総会開催費を出席会員に1シリング請求し、受領するか、その仕事の委任者を指定する。財務、または財務に委任された者は、総会の議長となり、会員によって提起された問題を議論する。

第4章は執事の職務に関する規則であるが、執事は演奏会が秩序正しく進行するように配慮し、6人が毎月ローテーションで職務にあたる。担当月の執事は運営委員と協力すると共に運営委員を兼務し、運営委員の会合の議事と、総会の議事を記録する。執事は、会の会合には、議事録、会則、会計簿、会員名簿を執務の机の上に置いておく。執事は、新会員の入会に際しての会費、会員の罰金、または没収物を徴収し、財務に報告する。執事に空席が生じた場合は彼らが選挙し、年度内に充足する。

第5章は運営委員の職務について決めている。運営委員は以下を行う。1) 月担当の楽長、財務、月担当の執事とともに行う会の管理と運営。2) 選挙後の8月の毎水曜日の会合と2日前に告知される財務または3人の運営委員が招集する会合への出席。3) 議事は上記の会合において、また5人以上の運営委員が出席しなければ、有効性を持たない。4) 8月の第2週に選出された運営委員および執事が職務を怠ったり拒否した場合、2ギ

ニー以下の罰金を課すこと。5) 年度内に運営委員の空席が生じた場合、運営委員の選挙による空席の充足。6) 罰金の支払いを拒否した会員を除籍し、他の会員に報告。7) 会員の名簿を年齢順に清書し、会合の度に執事の机に備えること。8) 財務が説明を行う評議員（Trustee）の指名。9) 会に寄付した会員に加入者の紹介を許可すること。10) 8月第2水曜日の総会前に財務と執事の監査を行うこと。11) 必要と判断されるとき総会の招集。また24人の会員から要求のあった場合の総会の招集。12) 会則の印刷と会員への配布。ただし総会で決定されなければ、会則とはできない。

第6章は入会と会費関係の規則であるが、入会するには演奏会員の年齢順の推薦で候補者となるか、会への寄付のあった演奏会員に運営委員により推薦が認められ候補者になった者が、次の演奏会で運営委員と演奏委員の選挙によって選出される。ただし、鑑賞会員は150人に欠員が生じること、演奏会員の候補者は演奏会において演奏技術が演奏会員から承認されること、そして運営委員と演奏会員の5分の4により選出されることが条件である。入会が認められた場合は4ギニー、それ以降の年会費は2ギニーである。入会が承認されて14日以内に入会金が支払われない場合は、他の人を選出する。会費を納めない場合は、会員と認めない。ただし運営委員に理由が認められた場合は、再加入を認める。

第7章は演奏会に関連しているが、10月から3月の毎水曜日に会員と夫人たちの楽しみのために演奏会を開催する。演奏会は7時に開始し、休憩をはさんで二回行う。休憩は30分を越えない。会員以外で、雇用されておらず、楽長と出席している運営委員の過半数に許可を得ていない者は、演奏することができない。会場係は面会者を会場に入れることはできないが、メッセージは出席者に伝えられる。

第8章は演奏会に関する禁止条項であるが、演奏会を乱すものは1ギニーの罰金、運営委員に認められていない者を会場に入れた場合も1ギニーの罰金である。

第9章は演奏に関する事柄であるが、演奏会員はハープシコードとダブルベース以外は自分の楽

器を使わなければならない。そして演奏会員は楽長が認めなければ、他の演奏会員から認められた楽器以外を演奏することができない。演奏会員は楽長が認めた場所とパート以外、演奏することができず、楽長が求めた演奏を拒否または無視することができない。演奏会ではどの演奏家にも演奏料を支払うことができない。音楽演奏中会員は女性席に留まってはならない。この章での規則に違反した場合は5シリングの罰金を払う。

第10章も演奏会に関係する規則であるが、楽長は演奏会場に7時以前に出席していなければならない。月担当の執事は演奏会場に6時前に出席していなければならない。他の会員に委任しない限り、演奏中に帰ってはならない。会員は演奏中、大声で話したり、拍手したり、叫び声をあげたり、その他の騒音を出してはいけない。鑑賞会員は演奏中、演奏家の間に入ったり、誰かを注視してはいけない。会員は演奏会場に入室した時、必ず執事の机に行き、自分の名前が名簿にあることを確認する。以上の規則に違反した場合は2シリング6ペンスの罰金を払う。

第11章も演奏会関連の規則であるが、演奏会に出席する会員は7時前に演奏会場に来て、執事の机で自分の名前が会員名簿にあることを確認する。会員は演奏が始まる前に着席する。演奏中会員は演奏会場に入室、あるいは席を変えてはならない。これらの規則に違反した場合は、1シリングの罰金を支払う。

第12章は執事の演奏会での役割に関する規則であるが、月担当の執事は演奏会の主導者(Chairman)となり、彼の机にきた会員を記録し、着席の合図をし、演奏開始の合図をする。違反があった場合は違反金を徴収する。出席している他の執事は主導者の執事を補佐し、違反金を請求し、徴収して主導者の執事に渡す。

第13章は夫人に発行される入場券に関する規則である。夫人の入場券は52枚発行され、月担当楽長と月担当執事にそれぞれ2枚ずつ渡されるほか、24人の会員に年齢順のローテーションで各2枚発行される。月担当執事は次回演奏会の入場券を権利の生じた出席会員に渡す。権利があつて出席しなかった会員には、翌日連絡員が入場券を届けるが、会員は連絡員にその礼金として1シ

リングを渡す。座席係は入場券を持たない夫人を入場着席させてはならない。受け取った入場券は最初の曲が終わったときに、執事の机にすべてを置く。10月最初の水曜日の演奏会の入場券は、9月最後の水曜日に執事が連絡員に届け、翌日連絡員が会員の家に届ける。会員以外には入場券は発行されない。

以上が大英図書館に所蔵されている『アポロ協会会則』の概要であるが、会則が現実にどの程度適用されたのかは不明である。しかし1736年にボイスがアポロ協会で『ダビデの嘆き』を初演したことが確実であり、ブルースによれば、1740年にアポロ協会で初演された劇的作品の歌詞が12曲出版されていることから、ある程度その会則が適用されたと考えてよからう。

この会則にははっきりした原則がある。1つは演奏会を確実に実施しようとする明確な意思の存在である。10月から3月まで毎水曜日に演奏会を開くのは至難の業であろう。興業であれば、同じ曲を演奏してもよい。しかし同じ会員を相手にするアポロ協会の演奏会では、曲目を変えなければならない。果たして会則が決定されてから、どれくらい続いたのであろうか。

役員の役割分担の明確さには、音楽の演奏家であれば分からない実感性が感じられる。ローテーションを決め、1月ずつ交代して、演奏会を実施していこうと計画している。主体性と協力体制の調和が見て取れる。

演奏形式には、すでに現代の演奏会形式が芽生えている、というべきであろう。18世紀初めにおいては、『スペクテイター』に描写されているように、劇場や歌劇場は社交場であり、演奏に十分注意せず、おしゃべりをし、恋愛ごっこに興じ、野次を飛ばしてライバルを蹴落とそうとした⁵。アポロ協会は、演奏会に秩序を求めている。演奏前に席に着き、演奏中の座席変更を禁じ、騒音を押さえて音楽に集中できる環境を作ろうとしている。会則がたとえ実施されなかったとしても、ここには新しい理想が書き込まれているということができよう。

ボイスの『ダビデの哀悼歌』が初演されたデビルズタバンは、居酒屋ということで、雑然とした

印象を受けるのだが、アポロ協会の会則通りに演奏が行われたとすると、居酒屋に対する私たちの思いこみを変更しなければならないであろう。鑑賞会員は150人いたのであり、演奏会員の人数は不明だが、その夫人に54枚の入場券が毎回発行されるわけであるから、250名近い観客を考えてよいであろう。このように、かなりの聴衆の前、整然とした環境で演奏が行われた、というのが現在考えられる初演の状況である。

それでは、歌詞はどのようなものであったろうか。

2 ロックマンの歌詞

ロックマンは1736年に自作の歌詞を出版した。その扉に、すでに述べた通り、「ボイス氏によって作曲され、1736年アポロ協会において演奏された。(Set to MUSIC by Mr. BOYCE/ And performed in/ The Apollo-Society, April 16, 1736.)」と記されている⁶。したがって、台本(Word Book)とは言っても、通常のように演奏に先だって出版されたものではなく、演奏の後に出版されたものであった。

この出版には、ロックマンの献呈の辞が詩の形式でつけられている。

To THE APOLLO SOCIETY,

GENTLEMEN,

BROUGHT forth in Solitude, my infant Muse,
To sylvan Scenes confin'd her humble Views;
Ne'er thought to leave her Verse-inspiring Grove,
Well pleas'd around its murm'ring Spring to rove.

(孤独に生まれたわが幼きミューズは／慎ましくも眺めるものを森の景色に限り、／詩心をそそる茂みから離れることを思わず、／せせらぎの泉の周りをそぞろ歩くことに満足していた。)

BUT at your gen'rous Call, she prunes her Wing;
Takes her swift Flight, in Towns attempts to sing.
Yet, all in vain, her artless Note she tries,
Till Harmony her rapturous charm supplies.
Till, by your Lutes and Voices solemn Sound,
Wak'd to new Life, she breathes Inchantment round.

(だがあなたがたが寛大にもお呼びくださり、翼の羽づくろいをして／迅速に飛翔して、都会で歌を試みた。／しかし、虚しくも、素朴な調べをためしたが、ついに調和の女神がうっとりとした魅力を添えた。／とうとうあなたがたの豎琴と声楽により厳粛な響きが加わり、ミューズは新しき命に目覚め、魅惑の声をあたりに響かせた。)

THUS Man (as Poets sing) first form'd of Clay,
Like kindred Earth unanimated lay,
Till fam'd Prometheus, bringing heavenly Fire,
A Work arises, which even Gods admire.

(このように人間は(詩人たちの歌う通り)初め粘土でかたどられ、同類の土よろしく生氣なく横たわっていたが、／やがて名声あるプロメテウスが天上の火をもたらし、／作品が生まれて、神々たちも誉め称えた。)

DID Fortune's Sons, like You, indulgent smile,
And call forth latent Merit thro' our Isle,
Bards wou'd arise, their Genius soon display,
As Flourets open to the Solar Ray.
Then in the Theatres the Muse wou'd shine,
Correct our Passions, and our Thoughts refine;
Wou'd frown on Vice, give Virtue her due Praise,
And throw new Glories round the British Bays.

(運命の女神の息子たちが、あなたがたのように、心広く微笑み、／わが島国にかけて眠れる能力を呼びさませば、詩人たちは立ち上がり、まるで小さな花々が太陽の光に向かって開くように、／その才能をすぐに示すだろう。／やがて劇場でミューズは輝き、私たちの熱情をたわめ、思想を純化するだろう。／悪徳には顔をしかめ、美德にはふさわしい称賛を与えよう。／そしてイギリスの国土にあらたな輝きを放つであろう。)

I am, with the greatest Respect, May 18, 1736.

Your most humble Servant,

J. LOCKMAN.

意味をまとめれば、詩人を私のように重用すれば、イギリスに徳が広まっていくだろう、と歌っているだけなので、献呈の辞の紋切り型の詩というべきである。しかし、すでに歌詞を依頼するとき、形式を詩人に任せていることが、合唱、レチタティーヴォ(recitative)、アリア(air)の区

別を詩人が指定していることから明らかになる。ロックマンは、単に詩作をしたのではなく、ヘンデルのために歌詞を書いたイタリア人作詞家や、ジェニズのようなイギリス人作詞家と同じく、作詞家として歌詞を書いたことが判明するのである。

作品は、合唱によって開始する。1736年初版は、1744年版と少し異なるので、訳のあとに示す。これらの第1連は、どちらも叙事詩に典型的な詩神への呼びかけであり、弱強5歩格の英雄体対句で書かれている。表記は、1736年版と1744版で大文字、コロンとセミコロン、ダッシュの使い方などで異なっているが、以下には1736年版で示す。

*Sing sacred Prophet, the Defeat of Saul,
His bleeding Death, and mighty Israel's Fall.
Sing holy David, lost to all Relief:
Describe his flowing Tears, and generous Grief.*
歌え、聖なる預言者よ、サウルの敗北を。
その血にまみれた死と、偉大なイスラエル人の
没落を。
歌え、救いようもなく途方に暮れる、神聖なる
ダビデよ。
そのあふれる涙と、ありあまる悲しみを描け。

(1744年版第1連)

*Sing, Sacred Prophet, Mighty Israel's fall
The sad Defeat and bleeding death of Saul
Sing, Pious David, lost to all Relief,
Describe his flowing Tears, and gen'rous Grief.*

第2連は、レチタティーヴォとして書かれている。

*Now Saul was by the proud Philistines slain,
And David march'd in Triumph from the Plain,
When an Amalekite, who late had fled,
(His Garments torne, and Earth upon his Head)
Approaching David low Obeisance paid,
And, to the prostrate Youth, the Chieftain said---
Whence art thou come? The prostrate Youth reply'd
From Israel's Camp, once-dreaded Israel's Pride.*

How, says the Chieftain, did the Battle go?---

Alas! He cries, my Story bleeds with Woe.

今やサウルは高慢なペリシテ人に打たれ、
ダビデは平野から勝ち誇って進軍すると、
戦場から逃げてきたアマレク人の若者が
(衣服は破れ、頭に土を載せていた)

ダビデに身をかがめて恭順を示し近づいた。

すると長はひれ伏す若者に言った。

いずこから来たのか。平身低頭の若者は答えた。
イスラエル人の駐留地、かつて恐れられたイス
ラエルの誇りの地から。

長は尋ねた。戦いはどうなったのか。

ああ！と彼は叫んだ。物語れば、悲しみに血が
流れる。

いよいよ物語の本体に入っていく。旧約聖書『サムエル記下』第1章第2節から4節に基づいてはいるが、本文が散文で書かれているのに対して、作品は弱強5歩格で英雄体対句となっており、事実を伝える個所でありながら、悲劇的な状況が強く伝わってくる。

第3連は、アリアと指定されている。

Israel is fallen, is undone,

Part are smitten, Part are fled:

Mighty Saul: His darling Son;

Both are vanquish'd, both are dead.

イスラエルは倒れた、崩れた。

ある者は打たれ、ある者は逃走した。

力あるサウルと愛する息子

共に征服され、共に死んだ。

この連は上記書同章第4節に続いている。強弱4歩格で最後の弱音節を欠いている。

第4連は、レチタティーヴォで詩形は弱強5歩格の英雄体対句に戻る。

David resum'd (his Soul afflicted sore)

How know'st Thou that the Princes are no more?

The Man rejoyns;..As late I chanc'd to stray

O'er lofty Gilboa's ever devious Way,

Behold Saul lean'd on his oft-lifted Spear,

(Chariots and Horsemen thund'ring on his Rear.)

The King looks back, and seeing me, he cries,
Come forward youth;—On swiftest Feet I rise—
Arrived:—says *Saul*, who art Thou?—Use no
Fraud?

I answer—an *Amalekite*, my Lord.—

The King then sigh'd, as tho' his Heart were broke;
Tears pearl'd his Eyes, and thus he faintly spoke.
ダビデは言葉を続けた（彼の魂は苦しみで痛んだ）

なぜ君は二人の君主が亡くなったことを知っているのか。

男は答える。この前たまたまギルボア山の曲がりくねった道に迷い込むと、

見よ、サウルがよく使っていた槍に寄りかかっていた。

（背後には戦車と騎兵が轟いていた。）

王は振り返り、私を見ると叫んだ。

進み出なさい、若者よ。素早く私は立ち上がり、近づいた。サウルの言うには、君は誰か。偽るな。

私は答える。アメレク人です、王よ。

すると王はまるで心が裂けるような溜息をつき、涙が目から真珠のように光って落ち、このように弱弱しく話した。

この個所は第3連に続いて上記書同章第5節から第8節を詩形で語っている。最後の2行は本文にはない付け足しである。

第5連は、サウルの言葉を歌うアリアとなる。

Swift indulge thy cruel Aid

To a Prince with Grief oppress:

In my Bosom sheathe thy Blade;

Pierce my Heart, and give me Rest.

早くおまえの残酷な助けを与えよ、

悲しみに打ちひしがれた王に。

お前の刃をわが胸に刺し

わが心臓を貫いて、安らぎを我に与えよ。

上記書同章第9節を敷衍したこの連は、強弱4歩格で、最後の弱音節を欠いている。

第6連は、レチタティーヴォであるが、上記書同章第10節と第11節を敷衍している。詩形は弱強5歩格の英雄体対句である。

Seeing the King thus tortur'd in his Mind,
To ease his crouding Woes I soon inclin'd,
Knowing that his great Soul cou'd ne'er survive
This Overthrow, and with Afflictions strive.—
I now advance, irresoutely-slow,
Afraid, and yet resolv'd, to strike the Blow.—
My Hands congeal'd. —He cries: Act well thy Part:

—

Amaz'd!—I send the Dagger to his Heart.

Trembling, I strip the Coarse; then, instant, flee,

And thus devote the precious Spoils to Thee.

王の心でかく悶絶する様を見て

群がる悲しみを取り除いてやろうとした。

彼の偉大な魂はこの敗北を生き抜き、

苦しみと闘えぬことを知ったゆえ。

私は今や、決心できずにゆっくりと王に近づき恐れながら、だが心を決めて、一撃を加えた。

手は血しぶきを浴びる。—王は叫ぶ。自分の役割を果たせ—

驚愕—短剣を心臓に突き刺す。

震えながら、身ぐるみを剥いだ。それから、そのまま逃げた。

そしてこのように貴重な戦利品をあなたに捧げます。

おそらく、第4行と第6行が同じ単語であるからであろう、大英図書館の初版本には、手書きで第4行が *from on high* に直してある。この連に対応する表現は『サムエル記下』には見当たらない。

第7連は、上記書同章第11節を敷衍したアマレク人のアリアとなっている。これも最後の弱音節を欠いた強弱4歩格である。

Take this Bracelet, deck thine Arm,

Saul's it never more will bind,

Take this Crown, that powerful Charm

To a throne-aspiring Mind.

この腕輪を受け取って、汝の腕を飾られよ。

もはやサウルに着けられることはない。

この冠を受け取られよ。王位をねらう心には魅力極まりなき冠を。

第8連はレチタティーヴォであり、上記書同章第11節と第12節に基づいている。ここも弱強5歩格の英雄体対句である。

Struck as with Thunder, David rends his Clothes,
And calls for Vengeance on th'insulting Foes,
His Men are mov'd, with Sighs their Bosoms heave;
Silent they weep, and humbly fast 'till Eve.

雷に打たれたかのごとくなり、ダビデは衣服
を切り裂き
屈辱を与える敵に復讐を呼びかけた。
家来は悲しみ、胸は溜め息で膨れた。
声を殺して彼らは泣き、夕べまでつましく断食
をした。

第9連は合唱であり、上記書同章第12節を敷衍している。詩形は弱強5歩格の英雄体対句である。

For Saul for Jonathan, they fast, they weep;
For Israel's House their Sighs no Measure keep:
For God's own People ceaseless Anguish feel,
'Cause all are fall'n by the destructive Steel.

サウルのため、ヨナタンのため、断食をし、忍
び泣く。
イスラエルの王家のためにその溜め息は留まる
ところを知らない。
神ご自身の民は無限の苦しみを感じている。
全ては破壊力をもつ鋼に倒れたゆえに。

第10連は、初版と1744年版に表現の違いが少しあるが、ここでは初版を示そう。基本的に弱強4歩格である。内容は上記書同章第13節と第14節に基づいている。

Says David, Whence are Thou?—the Youth goes
on:—

I'm an Amalekite, a Stranger's Son.—

Ah! (Cries the Chieftain) Wretch! what hast Thou
done!

ダビデは言う、おまえはどこかの者か。若者は続
ける。

私はアメルク人で、寄留者の息子です。

ああ！（長は叫ぶ）不届き者よ、何ということ
をしたのだ。

この連に関して、1744年版の第1行は次のよ
うになっている。

David again, Whence art Thou? —He goes on:—

第11連は、ダビデのアリアであり、強弱4歩
格で最終の弱音節を欠いている。内容は上記書同
章第14節を敷衍したものである。

How cou'd Conscience hush her Stings,

When thou temptedst to destroy

God's Anointed, chief of Kings,

Saul, who form'd a Nation's Joy?

良心の痛みをどのように鎮められるのか。

神に油を注がれた者、王の長、

民の喜びとなったサウルを

滅ぼす誘惑に駆られたおまえは。

第12連は、上記書同章第15節と第16節を敷
衍したものだが、詩形は最初の3行を除いて、弱
強5歩格の英雄体対句である。

Then David the Amalekite survey'd;

Look'd pensive round, and to a young Man said,

Advance; unsheathe thy Sword.—the Man obey'd

Plunge, plunge it deep, cry'd David, in his Side: —

He smote the Regicide, he fell: he died.—

The Chieftain then: —Thy Blood be on thy Head,

For Thou a Monarch's sacred Blood hast shed;

As thine own Lips now testify'd too plain,

Saying, the Lord's Anointed I have slain.—

Here David, fix'd in Grief, with humid Eyes,

O'er Saul and Jonathan thus breath'd his Sighs.

それからダビデはアマレク人を調べた。

悲しげに振り返り、若者に言った。

前に出よ。剣を抜け。—男は従った。

刺せ、深く刺せ、ダビデは男の脇で叫んだ。

男は王殺しを打った。彼は倒れ、死んだ。

長はそれから—お前の血がお前の頭にかかるう
に。

お前は君主の神聖な血を流した、
神に油注がれた者を打ったと、自らの唇で
明らかに証言したのだから。
ここでダビデは、悲しみに暮れ、潤んだ目で
サウルとヨナタンに対してこのように溜め息を
漏らした。

第 13 連以降は、ダビデの哀悼歌「弓」を基に
して、作詞されている。アリア用に書かれたこの
連は上記哀悼歌「弓」の冒頭、つまり「サムエル
記下」第 1 章第 19 節を敷衍しており、弱強 4 歩
格で、1 行ごとに脚韻を踏んでいる。

Sad Israel! Thy Beauty's Pride,

On yon high Mountains bleeding lies.

How have the mighty Warriors died!

No weeping Friend to close their Eyes.

悲しきイスラエルよ。麗しき者の誇りは、
はるかな高き山々で血を流しながら横たわっ
ている。

強力な戦士は如何に死んだのか。

悲しむ友に目を閉じてもらうこともなく。

第 14 連はレチタティーヴォで、上記書同章第
20 節を基に作られている。弱強 5 歩格の英雄体
対句の詩形をもっている。

Never, O never! Let this Guilt be known

In Gath, nor spread in scoffing Askalon;

Lest the Philistine Daughters lift their Voice,

The Daughters of th'Uncircumcis'd rejoice.

決して、ああ決してこの罪をガトに知らせては
ならない。

嘲笑うアシュケロンに広めてはならない。

ペリシテの娘たちが声を上げないように。

割礼を受けぬ者たちが喜ばぬように。

第 15-16 連はアリアであり、上記書同章第 15
節と第 16 節に基づいている。弱強 4 歩格で 1 行
置きに脚韻を踏んでいる。

On Thee, Mount Gilboa, may nor Dew,

Nor quick'ning Rain from Heav'n be shed,

To feed thy Plants, to cheer thy View:

Nor Fields of Offering Grace thy Head.

For, on thy Steep, the Shield of Saul.

Of mighty Saul is cast away,

As tho' he'd not been crown'd with Oil,

Nor bless'd by Heav'n's applauding Ray.

お前には、ギルボア山よ、天から
露も、繁き雨も、降り下りて
草木を潤し、眺めに生気を与えることのないよ
うに。
捧げものの野が頂きに恵みを与えることのない
ように。

その斜面にはサウルの盾が

力強きサウルの盾が打ち捨てられているゆ
え。

油注がれずに戴冠したごとく、
称賛の天の光の祝福のなきがごとくに。

第 17 連は、レチタティーヴォの比較的長い詩
行である。弱強 5 歩格の英雄体対句で書かれてい
る。内容は上記同章第 22 節と第 23 節に基づいて
いる。

The Bow fam'd Jonathan so strongly drew,

Discharg'd sure Death, which swift as Lightning
flew:

Where'er the Splendors of his Faulcion play'd,

Rank fell on Rank, and all were Breathless laid.

His Bow, his Sword, immortal Dangers sought,

And conquer'd 'em, 'cause they for Israel fought,—

Father and Son possess'd each other's Mind,

So sweet a Harmony their Souls combin'd:

This, in the strongest Friendships, had been try'd,

So strong, Death's Iron Hand cou'd ne'er divide.—

In many Exercises both excell'd,

And with like Force a Combatant repell'd.

Swifter than Eagles when they dart their Way:

Than Lions stronger, when they fight for Prey.

弓に名高きヨナタンは、力強く弓を引き、
必殺の矢を放てば、稲妻のごとく飛び行きぬ。
栄光の剣の動くところはいづくでも
戦士また戦士と倒れ、すべて息絶えて横たわった。

彼の弓も剣も手強き危険を求めて、
すべてを倒した。イスラエルのために戦ったゆえ。

父と子は心を一つとして
その魂は甘美な調和で結ばれた。
強い友情を持つ二人は試練を受けたが、
死の鉄の手も分けることはできなかった。
雄々しき働きに共に頭抜けて
そのふさわしき力で戦士を撃退した。
突進すれば、驚よりも速く、
餌食を求めて戦えば、獅子よりも強かった。

第 18 連と第 19 連は、合唱のために書かれており、内容は上記同章第 24 節に基づいている。詩形は弱強 4 歩格で、1 行置きに脚韻を踏んでいる。

*Daughters of Israel, weep o'er Saul,
Who cloath'd in the brightest Dyes,
With Sighs on Sighs bemoan his Fall,
Whose Smile was Glory to your Eyes.*

*Weep o'er his Urn whose dearest Care,
Was to improve the op'ning Mind;
To make you virtuous as you're fair,
And be the Wonder of your Kind.*

イスラエルの娘たちよ、サウルのために泣け。
彼はそなたたちを華やかな衣服で包んだ。
溜め息に溜め息をもって彼の敗北を嘆け。
彼のほほ笑みはそなたたちの目には栄光だった。

彼の骨壺のために泣け。彼の人の心碎きしは
広やかな心の涵養。
美しさとともに徳を養い
そなたたちを讃嘆的としたのだ。

第 20 連はレチタティーヴォで、上記書同章第

25 節と第 26 節に基づいたものである。詩形は弱強 5 歩格の英雄体対句である。

*How are the Mighty fallen! O how slain
'Midst the wild Horrors of th'embattled Plain!
O Jonathan! So cruel was the Dart,
All Israel bled when it tranfix'd thy Heart.---
My soul, young Prince, is deep distress'd for Thee,
For thine, too often was distress'd for me;
Thy pleasing Converse charm'd my Woes to Rest.
And wak'd the sweetest Transports in my Breast.---
Not the fond Love of Virgins when they pine
For absent Youths, cou'd be compar'd to Thine.*

力ある者はどのように倒れているのか。どのように打たれたのか。

戦いの野の限りなき恐怖の中で。

ああヨナタンよ。その一撃の酷さよ。

すべてのイスラエル人は、汝の心臓が貫かれた時、血を流した。

私の魂は、若き王子よ、あなたのために深き苦しみを覚えた。

あなたの魂も、私のために、あれほどしばしば苦しんだのだから。

あなたとの楽しい会話は私の悲しみを魅惑して安らわせた。

そして甘美な喜びをわが胸に目覚めさせた。

愛する若者の不在を嘆く乙女の愛は

あなたの愛と比べるべくもない。

第 21 連は合唱であり、上記書同章第 27 節に基づいている。詩形は第 1 行と第 4 行が弱強 5 歩格であるが、第 1 行は不規則である。第 2 行と第 3 行は弱強 3 歩格である。脚韻は第 1 行と第 4 行、第 2 行と第 3 行で踏んでいる。

*How are the Mighty fallen! O fallen! O how slain!
Their Arms at random tost!
Their glitt'ring Trophies lost!*

How bleed their Hearts on this inglorious Plain!
力ある者はどのように倒れたのか。ああ倒れたのか。ああいかに打たれたのか。
彼らの武具はばらばらにちらばっている。
きらめく戦利品は失われてしまった。

彼らの胸はこの不名誉の平原でいかに血を流しているのか。

以上が 1736 年に出版されたロックマンの歌詞『ダビデの嘆き』のすべてであるが、詩を細かく検討して分かる通り、『サムエル記下』第 1 章第 2 節から第 24 節までを詩形によって敷衍したものである。当時よく知られていたこの物語を、例えば第 18 連に見られるように、乙女の愛について、若者の不在を嘆くという紋切り型で表現する無理な表現がところどころ使われているとはいえ、全体として見れば、かなり巧みに歌詞に造り変えていると言えるであろう。

3 音楽

この歌詞に、ボイスはどのような曲をつけたのであろうか。作曲の構成は、表に見られる通りである⁷。第 17 連は、作曲から削除された。また第 19 連も作曲されなかった。その他は、その他はロックマンの指示に従って、レチタティーヴォ、アリア、二重唱、合唱として作曲されている。

次に上記の構成に従って 1 曲ずつ見ていこう。

第 1 曲は序曲であり、大きな分類に従えばフランス風序曲の様式で作られているが、開始部の緩徐部は、哀悼歌の性格に合わせて、荘重さではなく悲痛さに満ちている。対位法部もやはり悲しみに彩られている。この 3 声の対位法による音楽のあとには、短い終結部が付けられている。続いて、3 拍子のややメヌエットに似た音楽が奏され、次の合唱への準備が行われる。

第 2 曲は、合唱であるが、序曲の 3 拍子の気分を受け継いだ 4 拍子の前奏が付けられている。合唱部は、基本的には和声法に基づく四部合唱であるが、随所に意匠が凝らされている。合唱部の全体は、第 1 連を繰り返し歌う AA' の二部形式である。A 部においては、まず第 1 連の最初の 2 行が和声法で歌われ、第 2 行が繰り返し歌われる。第 3 行も和声法で歌われて、後半の “lost to all Relief” が繰り返され、さらに第 4 行が 4 声の対位法で歌われて、“and gener'ous Grief” の部分で和声法に帰り結ばれる。A' 部では、旋律が少し変えられ、第 1 連の最初の 3 行が和声法によって歌われる。第 4 行に至ると、4 声の対位法に変わ

り、“and gener'ous Grief” の部分で和声法に帰る。さらに和声法で第 3 行が歌われ、後半の “lost to all Relief” が繰り返される。その後第 4 行で再び 4 声の対位法になり、“and gener'ous Grief” の部分で和声法に帰る。もう一度第 4 行で直前とは少し変化を加えた 4 声の対位法となり、“and gener'ous Grief” の部分で和声法に帰って、全体を結んでいる。叙事詩であれば、詩神への呼びかけにあたる預言者ダビデへの呼びかけを、主題にふさわしく悲しみの情感を漂わせながら、簡素に、しかし必要なところには高揚感も与えて、巧みに作曲している優れた開始部だと言えよう。

第 3 曲は、第 2 連を典型的なレチタティーヴォ・セッコで、つまり通奏低音の伴奏による朗唱で、テナーが物語を伝える。唯一歌詞に変更があるのは、“Alas!” の部分が繰り返されていることである。(第 3 曲は 1744 年のダブリンでの演奏会では、カウンターテナーのレチタティーヴォに書き換えられている。)

第 4 曲は、アマレク人の若者のアリアである。原典の旧約聖書では、アマレク人の若者に、サウルやヨナタンへの同情を見ることは困難だが、歌詞では明らかに二人の王族の死を嘆く内容となっている。曲はその情感にふさわしく、ゆっくりとした 3 拍子の短調で旋律が作られている。全体はここでも AA'A' の三部形式で、短い前奏を受けて、テナー（1744 年版ではカウンターテナー）が第 1 連を歌う。第 4 行は繰り返されて歌われる。A' の部分では、同じ旋律で弦楽によって奏されるリトルネロである。第 1 連がもう一度最初から、今度は少し変化が加えられた旋律で歌われた後、第 3 行から第 4 行にかけてもう一度繰り返され、さらに第 4 行が 2 回繰り返される。そしてその第 4 行の 2 回目の繰り返しの中の “both” は高音のメリスマ唱法で強調されて、曲が結ばれる。開始部から保たれた情感を表わしながら、変化の兆しを表した、これまた巧みな作曲が行われていると言てよい。

第 5 曲は男声アルトによるレチタティーヴォであるが、第 5 連の最初の 10 行をレチタティーヴォ・セッコで歌い、最後の 2 行、つまり第 11 行と第 12 行をレチタティーヴォ・アコンパニヤート（伴奏付きレチタティーヴォ）で歌うところに特色が

ある。この最後の2行は、すでに訳出しておいた通り、サウル王が苦しさのあまり、止めをさしてくれる者を探したのだが、たまたま通りかかった若者に声をかけたところ、敵方のアマレク人だと分かって落胆するが、苦しさに耐えられずその若者に止めを刺してくれるように懇願するという悲劇的狀況を描いた部分であり、弦楽が落胆と不可避的狀況を巧みに表現している高度な技術が使われている個所である。作曲が歌詞の意味を十分に捉えた好例だと言うべきであろう。

第6曲は、レチタティーヴォに続いて男声アルトによって歌われる、サウル嘆願のアリアである。自分に止めを刺すようにという内容にふさわしく、速度は一転して急速となり、短調で暗く、情熱的である。一部にはヘンデルによる『アグリッピーナ』のクラウディオのアリアのリズムが用いられているが、ここでは明るさではなく、激しさの表現として使用されている。形式はここでも

AA'の二部形式であり、第5連が最初の3行まで歌われた後、第4行が“Pierce my Heart, pierce my Heart, and give me Rest, and give me Rest.”と半行ごとに繰り返して歌われる。また“give”の語にはメリスマ唱法が用いられている。第1連が繰り返される時、旋律はかなり変化するが、最初の旋律の変形であることに違いはない。ここでも最初の3行はそのまま歌われ、第4行が“Pierce my Heart, pierce my Heart, and give me Rest, give me Rest, pierce my Heart, pierce my Heart, and give me Rest, and give me Rest.”（下線はメリスマ唱法を表す）と半行ごとに繰り返されて、2度歌われる。しかも、2回目の“give”と4回目の“give”は、若干の変化が付けられている。こうして悲劇的な場面にも劇性が付けくわえられていることが特徴である。

第7曲は、引き続き男声アルトによって歌われる第6連のレチタティーヴォであるが、きわめて

表 『ダビデの哀悼歌』 楽曲構成

曲番	楽曲形態	演奏形態／声部	演奏／伴奏楽器	演奏時間 分秒	対応歌詞 連行
1	序曲	合奏	オーケストラ全奏	4.34	
2	合唱	四部合唱	オーケストラ全奏	5.23	I. 1-4
3*	レチタティーヴォ	カウンターテナー	通奏低音	1.18	II. 1-10
4	アリア	カウンターテナー	オーケストラ全奏	3.24	III. 1-4
5*	レチタティーヴォ	男声アルト	通奏低音・弦楽合奏（後半）	1.25	IV. 1-12
6	アリア	男声アルト	弦楽合奏	2.09	V. 1-4
7*	レチタティーヴォ	男声アルト	通奏低音・弦楽合奏（後半）	1.28	VI. 1-10
8	アリア	男声アルト	弦楽合奏	2.15	VII. 1-4
9	レチタティーヴォ	テナー	弦楽合奏	0.46	VIII. 1-8
10	合唱	四部合唱	オーケストラ全奏	3.12	IX. 1-9
11	レチタティーヴォ	テナー	通奏低音	0.26	X. 1-3
12	アリア	テナー	弦楽合奏	2.33	XI. 1-4
13	レチタティーヴォ	テナー	通奏低音	1.39	XII. 1-11
14	二重唱	カウンターテナー・テナー	弦楽合奏	4.52	XIII. 1-4
15	レチタティーヴォ	テナー	通奏低音	0.22	XIV. 1-4
16	アリア	テナー	オーケストラ全奏	4.40	XV. 1-4 XVI. 1-4
17	合唱	四部合唱	オーケストラ全奏	1.57	XVIII. 1-8
18*	レチタティーヴォ	カウンターテナー	オーケストラ全奏	2.39	XX. 1-10
19	合唱	四部合唱	オーケストラ全奏	2.14	XXI. 1-4

* 印は 1744 年のダブリン演奏会用の改訂版

表情の豊かな楽曲となっている。歌詞は、サウル王の嘆願を受けて、止めを刺すべきか逡巡するアマレク人の若者の心理を、レチタティーヴォによって描き出す作曲技法が用いられている。第5-6行では、“I now advance, irresolutely-slow,/ Afraid, and yet resolv’d, to strike the Blow.—”と若者の迷いが描かれているが、ここで曲はきわめて緩慢となり、その心理を鮮やかに描きだしている。その後、サウル王に止めを刺した若者は王からの貴重品の剥奪に移る。その変化をレチタティーヴォ・アコンパニャートによって、弦楽合奏が表現するが、“then, instant, flee,”で速度が急速となり、その場から逃走する様子が音楽によって描き出されている。このレチタティーヴォは、音楽の描写力が効果的につかわれている楽曲だと言える。

第8曲は、アマレク人の若者が、サウルから剥奪した貴重品をダビデに捧げる場面である。男声アルトによって歌われるこの曲は、急速でしかも長調で表現され、何の疑いもなく、喜んで受け入れられるであろうと考える単純な若者の考えが巧みに描かれている。曲は、やはりAA’の二部形式である。器楽の前奏の後、第7連が歌われるが、第3-4行がさらに2度繰り返される。2度目の繰り返しの時の“Charm”は、極めて長いメリスマが加えられている。A’の部分では、旋律が少し変化するが、第7連が一度歌われた後、第4行がもう一度繰り返される。さらに第7連がもう一度全4行繰り返されたのち、第4行が繰り返され、さらに第3-4行が2度繰り返されるが、最後から2回目の“Charm”にもう一度長いメリスマが加えられる。

第9曲は、テナーによる完全なレチタティーヴォ・アコンパニャートである。弦楽が第8連の最初の2行のダビデの驚きを急速な伴奏によって伝え、次の2行はゆっくりとした弱弱しい伴奏によって、サウルとヨナタンへの哀悼の意を表現している。

第10曲は、この悲劇的報告に対するダビデの率いるイスラエル人の悲しみの合唱である。全体はABの二部形式である。Aの部分では、前奏がなくいきなり第9連第1行が和声法の四部合唱で歌われた後、最後の“they weep”が繰り返される。第1行はもう一度繰り返され、さらに第1行が対

位法となる。さらに第2行の最初の“For Israel’s House”の部分も対位法で歌われた後、“Their sights no Measure keep:”で和声法に戻る。Bの部分では、旋律も変わり、第3行が和声法で歌われるが、その後第3行が対位法で歌われて、第4行目の“Cause all are fall’n”も対位法で歌われた後、“by the destructive Steel.”で和声法に帰る。このように第3行と第4行が音楽的に全く同様に扱われて、音楽を結ぶ。ここには、これまでの悲劇的事件をまとめて、イスラエル人の悲しみを民族全体の悲しみに転換する役割と、さらに物語を推進する役割があり、中間的区切りとして効果的に配置されていると言えよう。

第11曲は、レチタティーヴォ・セッコであり、第10連のダビデが若者の出身を確認する場面であるが、アマレク人であると知ると、第4行の一部が“Ah! Wretch! What hast Thou done!”と繰り返され、劇性が高められる。

第12曲は、急迫的な4拍子の弦楽伴奏により、切迫感が表現されたテナーによるアリアであるが、第11連が5回繰り返して歌われることが基本的な様式となっている。ただ、連を繰り返す際、“cou’d Conscience” “thou temptedst” “who form’d a Nation’s Joy”などの部分が繰り返されることがあり、連の繰り返しといっても、毎回全く同じく繰り返されるわけではない。また“Joy”はメリスマ唱法になることがあり、ここでも変化が付けられている。最後には、第4行がもう一度繰り返されて曲が結ばれる。これも簡素ながら、良く考えられた楽曲だと言える。

第13曲は、再びテナーのレチタティーヴォ・セッコとなり、第12連が歌われる。ここはダビデがアマレク人の若者を殺害するように命ずる場面であり、残忍性があるが、聖書の厳粛な事実として歌われている。楽曲の焦点は、むしろサウルとヨナタンの死を嘆く、最終2行であり、ゆっくりとその悲しみが伝えられる。

第14曲は、カウンターテナーとテナーの二重唱である。まず弦楽合奏で前奏曲が演奏される。この曲で特徴的なのは、オブリガートバイオリンにより寂しげな旋律が奏でられることである。歌詞部に入るとカウンターテナーによって第13連第1行と第2行が歌い出され、続いてテナーに

よって模倣される。第3行からは、いささかカノンの手法が使われる。第3行をカウンターテナーが歌うと、途切れることなくテナーが模倣し、第3行の終わり近くに来ると、カウンターテナーが歌いだし、途中でテナーがそれを引き継ぎ、それをカウンターテナーが模倣して、第4行をもう一度2人の斉唱によって歌う。少し弦楽の演奏があった後、第4行をカウンターテナーが歌い、行の途中でテナーが繰り返し、行の後半をカウンターテナーが歌い、その後半ももう一度2人で斉唱で歌って、連全体を結ぶ。連はもう一度繰り返されるが、今度はテナーが先に第1行を歌いだし、行の半分ほど来たところでカウンターテナーが歌い、そのまま第1行を続け、第1行が終わったところで、テナーが行の半分から歌い継ぎ、そのまま第2行の中間まで歌うと、カノンの手法でテナーが第2行の初めから歌いだし、行の後半を追いかけ合う対位法的な重唱で繰り返した後、斉唱によって結ぶ。少しオブリガートバイオリンの演奏が行われた後、第3行をカウンターテナーが歌い、行の途中で同じ部分をテナーが歌い、さらに後半をカウンターテナーが歌い、テナーが繰り返す。この第3行はカノンの手法で、対位法的に歌われた後、第4行も同様に、前半をカウンターテナーが先に、テナーが後に、後半もカウンターテナーが先に、テナーが後に歌い、第4行の前半をカウンターテナーとテナーのカノンで歌って、後半を2人で斉唱し、さらに第4行を2人の斉唱で歌って、後半の“to close their Eyes.”を斉唱で繰り返して、この連を終っている。曲は、寂しいオブリガートバイオリンの旋律で結ばれている。この部分は、唯一、ダビデの哀悼歌と言える部分があるので、繰り返しを主体としながら、悲哀の情感を高める器楽と、カウンターテナーとテナーという、同じようでありながら、微妙に異なる声部を使って、繰り返しを単調に陥らせないように工夫を凝らしている。そのため、静かな悲しみが伝わる楽曲に仕上がっており、この哀悼歌の中心となり得ているのである。

第15曲は、第14連のレチタティーヴォ・セッコである。カウンターテナーによって歌われる。1744年のダブリン演奏会版では、テナーによるレチタティーヴォに書き換えられている。

第16曲は、第15連および第16連のカウンターテナーによるアリアである。形式はAA'BAA'の拡大3部形式であり、唯一のダカーポアリアである。Aの部分では第15連が歌われるが、最終行は繰り返される。A'の部分も旋律が若干変えられるだけで第15連が歌われ、最終行が繰り返されるのも同じである。B部分になると、展開された旋律で第16連が歌われ、最終行は繰り返されるが、“applauding”の語は長いメリスマが加えられる。そしてAA'部は再び第15連に戻る。最終行の繰り返しも同じである。この歌唱は現代では謎である。なぜこのように明るく牧歌的な音楽に仕上げられたのか。歌詞の内容と音楽の乖離が現代では感じられる。残念ながら、この楽曲には解明されない意味が残されている。

第17曲は、歌詞の第17連を飛ばして、第18連を合唱にしたものであり、形式はABCの三部形式である。Aの部分では、第18連の最初の2行を4声の対位法によって歌うものである。Bの部分では、第3行を最初高音2声部で歌い、次に低音2声部で歌う。さらに後半部が最初高音2声部により、続いて低音2声部によって繰り返される。C部に移ると、第4行が4部の和声法で、“Whose smile was Glory, whose smile was Glory to your Eyes.”と急速に活気をもって歌われ、次に第4行が繰り返しなしに歌われる。さらに“Whose smile was Glory, whose Glory to your Eyes.”と2度繰り返され、次に繰り返される時は、前半部が対位法的に展開されるが、それも長く続かず、後半部が和声法によって結ばれる。短く変化に富んだ楽曲である。歌詞として作られた第18連は、作曲が行われていない。

第18曲は、第20連のレチタティーヴォ・アコンパニヤートである。ここで、ダビデが友人ヨナタンに思いを寄せる。生前の数々のヨナタンの思いやりを回想する度に暖かい弦楽が奏されて、印象的である。

第19曲は、第21連の合唱であるが、終曲として例外的に急速な、暗く情熱的な楽曲である。形式はAA'の二部形式である。A部では、最初の2行が和声法で歌われた後、第3行が和声法で繰り返され、第4行が4声の対位法で歌われる。A'部では、旋律が少し変化して、同様に最初2行が

和声法、第3行が和声法による繰り返し、そして第4行が4声の対位法となる。さらに第4行が和声法で2回繰り返されて、消えるように全体を結んでいる。この急速で暗く情熱的な表情付けといい、最終の弱音での終結といい、予想外の展開である。極めて個性的な終曲であるといつてよいであろう。

このように楽曲を詳しく調べてみると、ほとんどのアリアが二部形式によって書かれていることが判明する。ヘンデルのアリアが、ダカーポアリアを特徴としていたことを考えると、これは意識的な選択であったと考えるべきであろう。作品の長さも、演奏時間50分弱と短い。ヘンデルがパーセルを拡大してその展開を行い、新しい音楽をイギリスの人々に示したのに対して、ボイスはパーセルの持っていた簡素で微妙な音楽に立ち返ったのである。ボイスの音楽はその巧みさ、微妙さにおいて職人的である。よく聴かなければ分からない隠し味が多く、専門家に向けられていたような感じさえする。だが、当時のイギリスの人々の感性、アデイスンの議論を考えると⁸、それが自然な音楽と感じられたのかもしれない。レチタティーヴォの微妙さについては、ヘンデルにも当てはまるので、とりわけボイスの特徴とはならないであろうが、アリアと合わせて鑑賞するとその微妙さが明らかになる。合唱も簡素さが特徴である。しかも簡素でありながら、最後の合唱は独創性の強いものである。微妙、簡素でありながら、個性にも欠けていない。当時として優れた音楽といふべきであろう。

4 異稿の存在

ロックマンの歌詞を調査する過程で、ボイス以外の音楽家によって作曲された『ダビデによる哀悼歌』の存在が明らかになったので、以下に簡単に異稿として報告しておきたい⁹。

1740年版の扉には、1736年版において「叙情詩」(A Lyric Poem)とされていたジャンルが「オラトリオ」(An/Oratorio)と規定され、作曲家がMr. Smithとなっている。演奏は、ブルーワーストリートのヒックフォーズグレートルーム(Hickford's Great Room)と記されており、大英図書館に収められている版は第5版である。また次

のページには歌手が以下のように書かれている。

Mrs. ARNE./ Mr. BEARD./ Mr. RUSSELL. / Mr. REINHOLD.

詩のレイアウトは1736年版と、たとえばインデントの仕方やダッシュを破線にするなどの点で少し異なるが、第5連まで基本的に同じである。しかし第6連のレチタティーヴォは、1736年の第6連の前半で終わっている。

第7連のアリアは全く異なり、以下の通りである。

Fortune's Frowns, when most unkind,

Sooner sink a lofty Mind,

Than the lowly Soul, resign'd.

Fires fierce-flashing from the Sky, on high,

Level first, as wide they fly,

Domes, whose Summits brave the Sky.

運命の女神、この上なく不機嫌なとき、顔をしかめれば

諦めのため、高貴な精神は低劣な魂より、簡単に屈服して沈んでしまう。

空からの高みよりの激しく光る火は

広範囲を飛びながら、天に届かんばかりの

大伽藍をまず押しつぶす。

取り消し線と訂正は、1736年版と同じように手書きである。形式は強弱4歩格で、最後の弱音を欠いている。脚韻は3行で韻を踏んでいる。内容は、1736年版が「サムエル記下」第1章第11節に基づいているのに対し、この連は聖書に基づいていない。

第8連は、1736年版の第6連の後半が用いられている。

第12連のレチタティーヴォは、1736年版第12連の最初の5行のみが使われている。

第13連のアリアは、全く新しい連である。

Swift he fell, in early Bloom,

A just Victim, to the dark, the silent Tomb.

Tremble Mortals, nor thus dare:

Shield good Sovereigns: Be their Lives your darling Care.

若き花盛りに、彼は迅く倒れた、

暗黒と沈黙の墓に、当然の犠牲となった。
 人よ震えよ、かく挑戦するなかれ。
 よき王を守れ。彼らの命を保護せよ。

この個所は『サムエル記下』第1章第15節の敷衍というべきであろう。詩形は、第1行と第3行が強弱4歩格で最後の弱音節を欠いており、第2行と第4行が、強弱6歩格で、最終の弱音節を欠いている。脚韻は第1行と第2行、第3行と第4行で踏んでいる。

第14連は、レチタティーヴォで、1736年版の第12連の第7行から第9行までの3行が用いられている。

第15連は、全く新しいアリアとなる。

Trait'rous Rage, thy Bosom firing;

Fury all thy Soul inspiring;

Urg'd Thee to this horrid Deed.

Gentle Pity, heav'n-descending,

Justly all the Good befriending,

Thee to save, in vain would plead.

反逆的怒りは、汝の胸に火をつけ、
 魂をまったく鼓舞する激怒は

この恐ろしき行いに駆り立てた。
 やさしき憐れみは天から降りてくるもの。
 正しくもすべての善を友とするもの。
 汝を救わんとし、虚しくも嘆願する。

この後に、第14連の最後の2行、つまり第10行と第11行が続く。

1736年版の第17連の間に、新しいアリアの歌詞が作られている。つまり第17連の第6行の後に、次のアリアが挿入されているのである。

O the Sweets in Friendship found!

Blissful Sweets, an endless Round,

When two Hearts, as one unite,

Source, to each, of true Delight.

Other Pleasures must decay,

(Idle Pageants of a Day;)

Those of Friendship never die,

But, with Souls, ascend the Sky.

ああ、友情に見いだされる甘美さよ。

恵みあふれる甘美さは、終ることなき円環。
 二つの心が一つに結ばれると、
 互いに本物の喜びの源となる。
 他の快樂は減びゆく定め
 （一日限りの凡庸なお祭り騒ぎ）
 友情の喜びは減ぶことがなく、
 魂とともに、空に昇りゆく。

このあとに残りの4行がレチタティーヴォとして続けられている。

以上が、「スミス氏」によって作曲されたというロックマンの『ダビデの哀悼歌』の歌詞である。新しいアリアの追加によって歌詞が大幅に変化したということとはできないが、詩人として修辞法にこだわったということは明らかとなる。これは作曲家の要求であったのであろうか。それともロックマンの自発的な変更であったのであろうか。私たちは、その答えを持たないが、ボイス以外に作曲を試みる音楽家がいたことは興味ある事実である。

結び イギリス音楽の豊かさ

『ダビデの哀悼歌』を調べる過程で偶然分かったことであるが、アポロ協会がグリーンの主率によって統制された、大きな音楽演奏組織であることが明らかになった。そこには後にクラシック音楽の基本となる秩序と礼儀正しさが求められており、精神の集中も期待されていた。一般にデビルズタヴァンで初演されたということから想像されるような、酒亭での賑やかな中での演奏とは大きく異なる、音楽専門家集団による、訓練された聴衆によって聞かれた初演であったことを想定すべきなのである。つまり、『ダビデの哀悼歌』は音楽に理解をもった人々のために書かれた音楽だった、ということである。

そして作品は、この状況にふさわしい音楽となっていたというべきであろう。それは簡素でしかも意匠を凝らし、独創性にも欠けていない音楽を作り上げている。ヘンデルのような壮大さ、激しさをもっていないが、ボイスは意識的にヘンデル音楽の模倣を避けたのではないだろうか。静かな、しかし確固とした作曲態度で臨んだのだと考えるべきであろう。

1736年の初演については、反応が十分に把握できていないが、その後のヘンデルの『サウル』の作曲、今回明らかになった異稿によるスミスの『ダビデの哀悼歌』の作曲、さらに1744年のダブリンでの再演を考えれば、大きな反響を得たであろうことが推測できる。

周辺状況から離れても、作品分析のみでも音楽の質の高さが明らかとなる。ヘンデルと言えども、イギリス音楽界のこのような質的高さを熟知していたことであろう。それが彼がイギリスに渡った理由であろうし、市民権を取得して最後まで音楽活動が続けた理由であったことであろう。私たちは、ヘンデル音楽の理解のためにも、イギリス音楽の実態をさらに明らかにしなければならない。

(本論は、平成21-24年度科学研究費補助金研究「18世紀前半イギリスにおける音楽と演劇」(課題番号24520236)における研究成果の一部である。)

¹ MacArdle (1960) p.36

² Bruce (2000)

³ Ibid.

⁴ The British Library 所有本による。

⁵ The Spectator No. 443 (29 July, 1712) ではイタリアに比して、イギリスの観客の無作法さがトフツ夫人に指摘されている。

⁶ The British Library 所有本による。

⁷ 音楽は、Graham Lea-Cox 指揮 The Choir of New College, Oxford, The Hanover Band の演奏 CD (ASV Ltd., GAU 208) によった。

⁸ 高際 (2001)

⁹ The British Library 所有本による。

MacArdle, Donald, 'Beethoven and Handel,' *Music and Letters* Vol. 41, Issue 1, 1960

高際澄雄 「『スペクテイター』における歌劇論」、宇都宮大学外国文学研究会『外国文学』50号、2001年

テキスト

Lockman, John, *David's Lamentation over Saul and Jonathan*, 1736 (British Library 643 k3/ 12))

Lockman, John, *David's Lamentation over Saul and Jonathan*, 1740 (British Library 13HHI/ 855)

The Standing Orders of the Apollo-Society, 1733
(British Library c.19/ a.834)

参考文献

Bruce, Robert J., English Pamphlet of the CD *Boyce*, ASV Limited (GAU 208), 2000.

Dean, Winton, *Handel's Dramatic Oratorios and Masques*, Oxford University Press, 1959

Some Characteristics of Boyce's *David's Lamentation* *Over Saul and Jonathan*

TAKAGIWA Sumio

Abstract

As William Boyce's *David's Lamentation over Saul and Jonathan* was premiered in April 1736, it may have stimulated Handel to compose *Saul*, one of his masterpieces which was highly praised by Beethoven. For the groundwork to elucidate the contemporary musical context of Handel's activities, this paper was written to analyse this work of Boyce's, which is rather unknown to modern audience.

Boyce's *David's Lamentation* was first performed in an inn, Devil's Tavern, which may give an impression that it was played casually. However, *The Standing Orders of the Apollo-Society* tells us that the concerts of the Apollo-Society, to which Boyce belonged, and which had been organized by Maurice Greene, seem to have been conducted in order and politeness. The concerts were treated as serious affairs.

The analysis of the words of *David's Lamentation*, composed by John Lockman, shows that the story was taken from the *Second Samuel*, and relatively well written.

The music is analysed according to the order, which shows Boyce adopted not Handel's way, but Purcell's way of composition, creating rather a simple, delicate, but partly original work.

Those analyses suggest that British audience enjoyed not only Handel's dramatic music, but also delicate and original music of British musicians, which seems to show the richness of musical situations of Britain, and which must have supported Handel's great activities.

(2010 年 11 月 2 日受理)